『管子』における「静」の概念をめぐって

久富木　成大

はじめに
一　静
(一)　『管子』における場合
(二)　宋儒の場合
(三)　『易』と『説文』の場合
(四)　再び『管子』の場合
二　軍事
(一)　軍事と「静」
(二)　軍事と「気」
おわりに
注

はじめに

『管子』には、「静」という文字の使用例が九十五例ある。先秦の古書の中では、比較的に多い方であろう。こうした用例の多さからも推しはかられるように、同書のなかにおいて、この文字の荷なわされている意味は、決して単純なものではない。

小稿では、国君のとりおこなう内政、外国とのかかわりとしての軍事、その両方における場合の「静」の意味と働きを検討してみたい。そうして、そこから『管子』の書におけるこの文字の持っている、特殊な意味を明らかにしてみたいと思う。

一　静

(一)　『管子』における場合

「静を守る」ということが「幼官篇」の冒頭でいわれている。この篇の書き出し[1]の文脈にしたがえば、この「静を守る」ということは象徴的なことであり、具体的には次に述べるような行為の数々がなんらかの意味で、それに関わりを持つものであるとされているのである。

○若し夜虚に因り静を守れば、人物は則ち皇なり。五和の時節、君は黄色を服し、甘味を味ひ、宮聲を聽き、和氣を治め、五數

を用ひ、黄后の井に飲み、倮獸の火を以て爨し、溫濡を藏め、毆養を行ひ、坦氣修通す。凡そ物靜を開けば、生理を形し、常に命に至る。賢を尊び、德に授くれば、則ち帝たり。仁を身にし、義を行ひ、忠を服し、信を用ふれば則ち王なり。謀を審かにし、禮を章かにし、士を選び、械を利すれば則ち霸なり。生を定め、死に處し、賢に謹み、伍を修むれば則ち衆なり。賞を信にし、罰を審かにし、材を爵し、能を祿すれば則ち強なり。凡を計り、終を付し、本に務め、末を飭ふれば則ち富む。法を明かにし、數を審かにし、常を立て、能を備ふれば則ち治まる。同異、官を分たば、則ち安し。之に通ずるに道を以てし、之を畜ふに惠を以てし、之を親むに仁を以てし、之を養ふに義を以てし、之に報ずるに德を以てし、之を結ぶに信を以てし、之に接するに禮を以てし、之を和するに樂を以てし、之を期するに事を以てし、之を攻むるに官を以てし、之を發するに力を以てし、之を威すに誠を以てす。（若因夜虛、守靜、人物則皇、五和時節、君服黃色、味甘味、聽宮聲、治和氣、用五數、飲黃后之井、以倮獸之火爨、藏溫濡、行毆養、坦氣修通、凡物開靜、形生理、常至命、尊賢授德、則帝、身仁、行義、服忠用信、則王、審謀章禮、選士利械、則霸、定生、處死、謹賢、修伍則衆、信賞、審罰、爵材祿能則強、計凡付終、務本飭末則富、明法審數、立常備能則治、同異分官則安、通之以道、畜之以惠、親之以仁、養之以義、報之以德、結之以信、接之以禮、和之以樂、期之以事、攻之以官、發之以力、威之以誠＝『管子』卷第三　幼官第八）

書き出しの部分についての『管子纂詁』の解は、以下のごとくである。

○人心は晝は實にして、夜は虛なり。夜虛にしたがいより、以て靜を守れば、晝間務に應ずるの時といへども、其の心は虛靜、なほ夜のごときなり。趙用賢云ふ、人物二字は疑ふらくは衍ならんか。物は事なり。皇は大なり。言ふこころは人君よく虛に處り靜を守れば、則ちこの人、事を發すること皇大なり。衡おもへらく、下文中の圖、人物の二字を疊（かさ）ねず。趙說、是なり。（人心晝實而夜虛、順因夜虛以守靜、雖晝間應務之時、其心虛靜猶夜也、趙用賢云、人物二字疑衍、物事、皇大也、言人君能處虛守靜、則發之人事皇大也、衡謂、下文中圖、不疊人物二字、趙說是也＝安井息軒『管子纂詁』）

その要点を示せば、以下のごとくである。つまり、人君たるもの、静かな夜のような心境で人事に対応すれば、「皇大」ともいわれる、偉大な業績をあげることができるという。したがって、「静を守る」ということは、ものごとを行うにあたっての、「とらわれた心」、あるいみではそれはまた「主観」を可能な限り排し去った心境を獲得し、維持することをいっているのである。

主君は、「静を守る」ということをしたうえで、「五和の時節」には、以下のような行動をとる。それらの行動がいかなるものかをのべるに先立って、順序として「五和の時節」そのものについての、『纂詁』の解をみておきたい。

○五は土の數なり。五和の時節とは、土旺の時を謂ふなり。（五土數、五和時節、謂土旺之時＝『管子纂詁』）

『管子』のこの行文の背後には「五行思想」があり、それにのっとって文章が展開されるのであるとして、息軒は解説をすすめている。「五行思想」にたてば、「五和の時節」とは、ここに息軒がのべているように、「土旺」、つまり「土用」の時期のことである。この間の事情については、例えば『礼記』月令に以下のようにのべられている。

○中央は土なり。其の日は戊己にして、其の帝は黄帝、其の神は后土、其の蟲は倮、其の音は宮、律は黄鐘の宮に中り、其の數は五、其の味は甘、其の臭は香、其の祀は中霤、祭るには心を先にす。天子大廟の大室に居り、大路に乗り、黄駵に駕し、黄旂を載て、黄衣をき、黄玉を服し、稷と牛とを食ふ。其の器は圜にして以て閎なり。(中央土、其日戊己、其帝黄帝、其神后土、其蟲倮、其音宮、律中黄鐘之宮、其數五、其味甘、其臭香、其祀中霤、祭先心、天子居大廟大室、乗大路、駕黄駵、載黄旂、衣黄衣、服黄玉、食稷與牛、其器圜以閎=『礼記』　月令)

「土の気」は、「数」では五に、五行では配当されている。「月令」の下じきとなっているのも、実は「五行思想」に外ならない。『管子』幼官の、「君」の土用の時節の行動の数々を見るとき、それらがいかに「土の気」の支配する時期の「気」に合致させようとしたものであるかが、よくわかるのである。つまり、「君主」が「黄色」の服を[2]着用し、甘味を味わい、宮声を聞き、「黄后の井」、即ち中央の井戸の水を飲み、倮獣[3]の骨を燃やして炊事をするという行為が、「月令」にみるとおり、「五行」の「土」の気に配当された「物」に、すべてかかわってくるわけである。こうして、これら「五行の土の気」に合した行為を、君主は行ない、さらに『管子』幼官篇では、いわばそれらの総仕上げとして、「溫濡を藏し、敺養を行う」ことを必須のこととする。では、これはいかなる行為なのであろうか。まず、この前半について、注解者のいうところについて聞いてみたい。

○藏とは之を包むを謂ふ。心に在りて君の藏する所のもの、溫和濡緩なるは土氣を助くる所以なり。(藏、謂包之、在心君之所藏者、溫和濡緩、所以助土氣=尹知章)

○舊注に云ふ。濡は古への軟字。則ち字はまさに溳に作るべし。古書は濡溳つねに相い誤る。後儒、遂に溳義を以て濡字に歸するは、非なり。溳は柔なり。溫柔の心を藏して中にあるなり。(舊注云、濡古軟字、則字當作溳、古書濡溳每相誤、後儒遂以溳義歸濡字非也、溳、柔也、藏溫柔之心在中=安井息軒『管子纂詁』)

君主たるもの、心の中に「温和濡緩」さ、あるいは又、「温柔」さを持っていなければならないという。温(あたたかさ)と和(なごやかさ)、濡(うるおい)、緩(ゆるやかさ)、また柔(やさしさ)が心の中に在存することが求められるのである。では、これらの心のあり方は、なんのために求められるのか。答えは尹知章の、「土気を助けるゆえん」という説明の中に求められるべきであろう。

つぎに後半部分、つまり「敺養を行う」にうつる。

○禽獸の屬、よく苗害を爲すもの、時に之を敺逐するを謂ふ。嘉穀を養ふ所以なり。(謂禽獸之屬能爲苗害者、時敺逐之、所以養嘉穀也=尹知章)

○邪を敺ひ、正を養ふの政を行ふ。(行敺邪養正之政=安井息軒『管

子纂詁』）

ここでは尹知章は具体的な例をあげて述べている。「野生の鳥やけだものが穀物の苗を食い荒らさないよう、時々追い払わなければならない。これは穀物を保護するためである」、と。一方、息軒の方は「悪を退けて、正義をさかんにするための政治を行う」という。

これら具体的なことは、ある事の比喩として述べられているのである。では何を比喩しているのか。これはいうまでもなく前にすでに述べられている、「土気」の働きを助ける行為に外ならない。

すでにみてきたように、『管子』の本文では「坦気修通す」と述べている。そうしてそのしめくくりとして、「凡物、静に開きて生理を形（あら）わし、常に命に至る」とむすばれている。ここを注解者たちは以下のように解きあかしている。

○坦は平なり。土政を平らかにすれば、則ち其の氣修通す。（坦、平也、平土政、則其氣修通＝尹知章）

○凡そ土王の時、生ずる所の物、但だ開通安静なれば、則ち其れ自ら生を形（あら）はす。既に理の常に循へば、則ち賦する所の命を殘盡すること無きなり。（凡土王之時所生之物、但開通安静、則其形自生、既循理之常、則無殘盡於所賦之命也＝尹知章）

○坦は平なり。修は飭なり。開は發なり。形は見なり。土の平氣飭通すれば、則ち凡物静中に發し、生を動かすの理を形見するなり。（坦平、修飭也、開發也、形見也、土之平氣飭通、則凡物發乎静中、形見動生之理＝安井息軒『管子纂詁』）

○命に至るとは各々その性を遂げるを謂ふ。（至命謂各遂其性＝安井息軒『管子纂詁』）

「土気」の働きを助けることによって、その結果として「土気」の働きが修め整えられる。そうすれば、「土気」が十分に行きわたることになる。

「土気」が十分に行きわたるということは、純粋な「土気」の世界の現出することをいう。「土気」が支配する時期、即ち「土用」にあっては「土気」が圧倒的に増加して、ほとんど雑り気がなくなったような状態があらわれる。そのような状態を『管子』では「静」といっている。「静」が実現したとき、新たな「力」がそこに生ずる。その力とは、「物」が「物」としての形をとるにいたる、ある方向性をはらんでいる。

「土気」が圧倒的になるということは、その空間は、あるいみで、特に他気にとっては「無」の世界、「虚」の世界であるということになる。こうした観点から、「静」をとらえ、新らしい「力」の発生を、注解者たちはとっているとも考えることができよう。その「力」と、「力」の方向性、つまり「物」が形をとる方向への根源の「力」がどこから発生するかについて、彼らは考えていたと見たい。

一般に、『管子』のこの部分の解釈としては、しかしながらこうではない。手近かなところから任意に引用して以下に示すことにする。

○おだやかな平坦の気が行きわたり、万物は安静のうちに発生し、物それぞれの生態の理を現出させる。私意を去った虚無の状態に身を置き、私欲を去った静の態度を守り、人を人とし物を物としてそのあるがままに任せるとき、それは皇にふさわしいあり方である＝『管子』上）④

「皇帝」の態度は別として、万物が発生する基盤、背景について

の「安静」についてのとらえ方が、単なる場所の「静かさ」をいっているばかりであるように思われるからである。ここでも、やはり「皇帝」の態度についていわれている、「虚無」性についてふれられねばならないであろう。

○凡物開静云々トハ、凡百ノ物ノ始ハ、皆静ニシテ見ルナク、聞クナキモ、漸クニシテ發展シ、生活ノ理ヲ實現シテ、各其ノ天命ノ本性ヲ遂グ（富山房『漢文大系』本『管子纂詁』頭注）

これは「物」の始まりが、まわりの環境に与える状態についていっている。つまり、「静」を、「音が出ない」ことや「動きがない」こととしてとらえていることになる。

『管子』のなかで多用されている「静」の字の用法は、これでは不十分であるように思われてならない。そこには「気」の動きと、「無」ないしは「虚」ということへのかなりの程度の深い洞察がこめられているように見られるからである。ここに『管子』の場合の本質的なものがあるのではないかと思われる。

(二) 宋儒の場合

「静」ということを明白なかたちで語っているのは、宋代の儒者たちである。『管子』の時代よりはるかに降ってはいるが、しばらく彼らの説くところについて見ていきたい。

○濂溪先生曰く、無極にして太極あり。太極動いて陽を生じ、動くこと極まって静かに、静かにして陰を生ず。静かなること極まって復た動く。一動一静、互いに其の根となり、陰に分かれ陽に分かれて両儀立つ。陽變じ陰合して水火木金土を生じ、五氣順布して、四時行く。五行は一陰陽なり。陰陽は一太極なり。太極はもと無極なり。五行の生ずるや各々其の性を一にす。無極の眞と二五の精、妙合して凝る。乾道は男と成り、坤道は女と成る。二氣交感して萬物を化生し、萬物は生生して變化窮まること無し。

惟だ人のみは其の秀でたるを得て最も靈なり。形すでに生じ、神發して知り、五性感動して善惡分れ、萬事出づ。聖人これを定むるに中正仁義を以てし、而して静を主として、人極立つ。故に聖人は天地とその德を合わせ、日月とその明を合わせ、四時とその序を合わせ、鬼神とその吉凶を合わす。君子は之を修めて吉なり、小人は之に悖りて凶なり。故に曰く、天の道を立てて陰と陽といふ。地の道を立てて柔と剛といふ。人の道を立てて仁と義といふ。又いはく始めを原ねて終りにかへる、故に死至の説を知ると。大なるかな易や、これ其の至なるかな。（濂溪先先曰、無極而太極、太極動而生陽、動極而静、静而生陰、静極復動、一動一静、互爲其根、分陰分陽、兩儀立焉、陽變陰合、而生水火木金土、五氣順布、四時行焉、五行一陰陽也、陰陽一太極也、太極本無極也、五行之生也各一其性、無極之眞、二五之精、妙合而凝、乾道成男、坤道成女、二氣交感、化生萬物、萬物生生、而變化無窮焉、惟人也、得其秀而最靈、形既生矣、神發知矣、五性感動而善惡分、萬事出矣、聖人定之以中正仁義而主静、立人極焉、故聖人與天地合其德、日月合其明、四時合其序、鬼神合其吉凶、君子修之吉、小人悖之凶、故曰、立天之道、曰陰與陽、立地之道、曰柔與剛、立人之道、曰仁與義、

又曰原始反終、故知死生之説、大哉易也、斯其至矣＝『近思録』巻一　道體篇）

ここに示したのは『近思録』の冒頭に引かれている、周敦頤（一〇一七～一〇七三）の『太極図説』である。この文章では、万物がどのようにして生成されるかを説いている。

すでによく知られているように、「無極」は『老子』から引かれている。つまり、「無極に復帰す」（復帰於無極＝二十八章）と『老子』の文にはいう。「太極」は『易経』繫辞上伝に、「是の故に易に太極あり」（是故易有太極）というところに出典を持つ。

万物のもとである「太極」は、「静」と「動」の運動の力を秘めている。この運動を通じて、太極は「陰」と「陽」の二気を生み出す。この「陽気」と「陰気」とはお互いに感応しあう運動を通じて木・火・土・金・水になり、やがてそこから「万物」が生ずることになる。

「万物」が生ずるについて、「太極」の持つ「静」と「動」のエネルギーとそこから生ずる陰陽二気の感応が大きな要因となることをすでに述べた。こうした点に関して、つぎのように「感応」ということを、強調する説もある。

○明道先生曰く、天地の間、ただ一箇の感と應と有るのみ。更になにごとか有る。（明道先生曰く、天地之間、只有一箇感與應而已、更有甚事＝『近思録』巻一　道體篇）

これは天地の間における、陰・陽二気が感・応というただ一つの現象を通じ「万物」が生ずるのであると、この現象の占める位置の大きさを強調しているのである。[5]

周敦頤・程明道らは「万物」が生ずるのに、「太極」の有する「動」と「静」のエネルギー、あるいはまた陰陽二気のあいだの「感応」ということの大きさをいう。これらの説は、「物」が生ずるのは環境の条件によってではなく、成立過程における「物」自体にその要因があるのだと、一般化していうことができよう。

このことは又、以下のような説によっても述べられている。

○近くこれを身に取れば百理みな具わる。屈伸往來の義、只だ鼻息の間において之を見る。屈伸往來はただこれ理。必ずしも既に屈するの氣を將って復たまさに伸ぶるの氣となさず。生生の理、自然にやまず。復卦に七日にして來復すというが如き、其の間もとより斷續せず、陽すでに復た生ず。物極まれば必らず返る。その理須らく此くの如くなるべし。生あれば便ち死あり、始めあれば便ち終りあり。（近取諸身、百理皆具、屈伸往來之義、只於鼻息之間見之、屈伸往來只是理、不必將既屈之氣、復爲方伸之氣、生生之理、自然不息、如復卦言七日來復、其間元不斷續、陽已復生、物極必返、其理須如此、有生便有死、有始便有終＝『近思録』巻一　道體篇）

「万物」の生ずるある段階について、ここでは「屈伸往来」ということをいう。これは、「物質」の「気」のレベルについて述べているのである。[6]

(三)　『易』と『説文』の場合

前節のおわりの部分でふれた「屈伸往来」ということは、『易経』の以下の文章に由来する。

○Ⅰ

易に曰く、憧々として往來すれば、朋、爾の思ひに從ふ、と。子曰く、天下何をか思ひ何をか慮らん。天下歸を同じくして塗を殊にす。一致にして百慮す。天下何をか思ひ何をか慮らん。（易曰、憧憧往來、朋從爾思、子曰、天下何思何慮、天下同歸而殊塗、一致而百慮、天下何思何慮＝『繫辭下』）

○Ⅱ

日往けば則ち月來り、月往けば則ち日來る。日月相い推して明生ず。寒往けば則ち暑來り、暑往けば則ち寒來り、寒暑相い推して歳成る。往くとは屈するなり。來るとは信（の）ぶるなり。屈信相い感じて利生ず。（日往則月來、月往則日來、日月相推而明生焉、寒往則暑來、暑往則寒來、寒暑相推而歳成焉、往者屈也、來者信也、屈信相感而利生焉＝『繫辭下』）

○Ⅲ

尺蠖の屈するは、以て信（の）びることを求むるなり。龍蛇の蟄するは、以て身を存せんとするなり。義を精しくして神に入るは、以て用を致すなり。用を利し身を安んずるは、以て德を崇むるなり。此を過ぎて以往は、未だ之を知ることあらず。神を窮め化を知るは德の盛なり。（尺蠖之屈、以求信也、龍蛇之蟄、以存身也、精義入神、以致用也、利用安身、以崇德也、過此以往、未之或知也、窮神知化、德之盛也＝『繫辭下』）

まずⅠの部分を検討する。ここで使われている「往来」という表現は直接的である。「おろおろとして往きつもどりつする」ということであるにすぎない。つまり逡巡する心の動き、それに無意識のうちに付随する足の動きと移動をあらわしている。しかし、それらの行動はここでは軽視されている。それは、この「往来」を支える主人公の「思い」は、いかにも小さいからであり、したがって「往来」そのものの持つ他への作用が限りなく小さいととらえられているからである。「往来」はこうあってはならないとする一つの手本として、ここではあげられていると見るべきであろう。人間の人為的「思い」に由来する「往来」など、取るに足りないと位置づけられているのである。

つぎに、Ⅱの部分に移る。ここの主人公は前節の「人」とちがって「日」・「月」・「寒」・「暑」である。Ⅰの部分の「人事」とちがって、これらは広大な自然の一部である。これら大自然の「往来」がいかに大きいものであるか、Ⅰにおける「人事」のそれと対比されることによって強調されているのである。その大きな「往来」をする日月寒暑は、いわば自然の代表者であるとしてあげられている。そうして、それらはお互いに往き来し、交代すると述べられている。さらに、ここではその「往」と「来」とを別のことばでいい替えても可能であるとする。それは、「往」を「屈」に「来」を「信」にである。

「往」を「屈」と訓ずることについての妥当性のいかんについてしばらく考えたい。『説文解字』（許慎）および『説文解字注』（段玉裁）では「屈」の字を以下のように説く。

○屈（屈）尾無きなり、尾に从ふ、出の聲。（無尾也、从尾出聲＝許慎）

○韓非子曰く、鳥に翾あり。翾とは、重首にして屈尾なり、と。

高、淮南に注して、屈は讀みて、秋雞に尾屈無しの屈の如くす、と云ふ。郭、方言の隆屈に注して屈尾と云ひ、淮南の屈奇の服に許、注して、屈は短也、奇は長也、と云ふ。凡そ短かき尾を屈と曰ふ。玉篇に巨律の切。玄應書・廣韵に衢勿の切。今の俗語は尚ほかくの如し。引伸して凡そ短きの偁と爲す。山の短高なるを崛といふは其の類なり。今人の屈伸の字、古へ詘申に作り、屈字を用ひず。これ古今字の異なり。鈍筆を掘筆といひ、短頭の船を撅頭といふは、皆な字の假借なり。(韓非子曰、鳥有翩翩者、重首而屈尾、高注淮南云、屈讀如秋雞無尾屈之屈、郭注方言隆屈云、屈尾、淮南屈奇之服、許注云、屈、短也、奇、長也、凡短尾曰屈、玉篇巨律切、玄應書、廣韵衢勿切、今俗語、尚如是、引伸爲凡短之偁、山短高曰崛、其類也、今人屈伸字、古作詘申、不用屈字、此古今字之異也、鈍筆曰掘筆、短頭船曰撅頭、皆字之假借也＝段玉裁)

○九勿の切。十五部。按ずるに九勿は當に衢勿に作りて乃ち合ふべし。俗に屈屈を分けて二字と爲すは、屈は乃ち屈の隷變なるを知らず。(九勿切、十五部、按九勿當作衢勿乃合、俗分屈屈爲二字、不知屈乃屈之隷變＝段玉裁)

本来、「屈」はここに許慎がいうように、「尾無きなり」というごとくであったもののようである。しかし『段注』が説くように、種々の古典の中での使用例としては、「短い尾」という使い方が一般的であり、そこから引伸して「短かい」という意味で使われるようになった。

「短かい」という訓詁の周辺には、多くの類似語があったはずである。例えばその強調語として使われていた語があり、以下のように古典にあらわれている。

○天の道は虛、地の道は靜なり。虛なれば則ち屈(つ)きず、靜なれば則ち變ぜず。變ぜざれば則ち過ち無し。故に曰く、貸(たが)はず、と。(天之道虛、地之道靜、虛則不屈、靜則不變、不變則無過、故曰不貸＝『管子』巻第十三　心術上)

この「屈」について尹知章の注はつぎのようである。

○屈は竭なり。(屈、竭也)

つまり、「短かい」という意味が強調され、「無くなる」「竭(つ)きる」という用法があったのである。さらに、以下のような意味も存在している。

○利、一孔より出づる者は、その國、敵なし。二孔より出づる者は、其の兵、詘せず。三孔より出づる者は、以て兵を擧ぐべからず。四孔より出づる者は、その國、必らず亡ぶ。先王はその然るを知る。故に民の羨を塞ぎて、その利途を隘くす。(利出於一孔者、其國無敵、出二孔者、其兵不詘、出三孔者、不可以擧兵、出四孔者、其國必亡、先王知其然、故塞民之羨、隘其利途＝『管子』巻第二十二　国蓄第七十三)

ここに「(利)二孔より出づるものは、その兵、詘せず」という。尹知章の注では、ここは以下のごとくなっている。

○詘は屈と同じ。屈は窮なり。(詘與屈同、屈、窮也)

詘が屈と同じであるというのは、すでに『説文解字注』(段玉裁)において「此れ古今字の異なり」と説いているところである。「竭(つ)き」方の程度がいよいよ強まり、極点にまで達することをいうので

あると、ここで尹知章は注解している。

日・月・寒・暑の往来ということについて、「往」が「屈」と同義であるという意味は、ここにこれまで見てきたごとくである。「日」や「寒」が極まり竭（つ）きて、「月」および「暑」と入れかわるということになるのである。

この章で引いた『易経』繫辞下のなかでのもう一つの訓詁に、「来は信なり」というという記述があった。このことについて、特に「信」の意味を、『説文解字』および『段注』によってみてみたい。

○𠊱（信）誠なり。人言に从ふ。但、古文の信、省くなり。訫、古文の信。（誠也、从人言、但、古文信、省也、訫、古文信＝許慎）

○釋詁、誠は信なり、と。（釋詁、誠信也＝段玉裁）

○序に會意を説きて曰く、信・武これなり、と。人言へば則ち信ならざるもの無し。故に人言に从ふ。息晋の切。十二部。古は多く以て屈伸の伸と爲す。（序説會意曰、信武是也、人言則無不信者、故从人言、息晋切、十二部、古多以爲屈伸之伸＝段玉裁）

○言、必らず衷（うち）よりするの意。（言必由衷之意＝段玉裁）

『易経』繫辞伝がここにいう「来は信なり」というところの「信」は、段玉裁が、古えは多く以て「屈伸」の「伸」となす、といっているところの、「伸」にあたる。これは音が類似していることによる、仮借用法であろう。しかしこの場合、それに止まらない。「信」は、ここに段玉裁がいうように、「言必らず衷（うち）よりするの意」という意味を持っている。それと同じように、「伸」にもやはり内部から発展してくるような力、あるいは動きというような意味を持っている。「のびる」というのは、そうしたことであろう。「信」と「伸」は音が近いだけでなく、意味も近いようである。

日月寒暑のあいだには、「屈伸往来」によって交代がおこなわれる。『易経』繫辞下がここに説くところでは、例えば日と月とのあいだの「屈伸往来」は、日と月との二者の感応によっておこるのであるという。「屈伸往来」するもののあいだには、別個のものではありえないところの、深いつながりが予想される。日が極点にまで達すると、やがて間をおくことなく「竭（つ）き」る方向にむかう。この「竭」の方向に感じ、応ずるかたちで、月が登場してくる。日月一体化した大自然の中から、日が「竭」きたとき、月が「信（の）び」てくるということになる。

『易経』繫辞下からの引用文Ⅲでは、この「屈伸往来」、ことに「屈往」が「力」の大きなみなもとであると説かれている。尺取り虫が「屈」するのは、大きく「信」を得るためであるとする。また、龍蛇が冬ごもりして、身を屈して穴にひそむのは、後日の大いなる生命力を、それによって獲得しようとしてのことであるという。

㈣　再び『管子』の場合

「屈信（＝伸）往来」の動作は、「屈往」と「伸来」の二つに分けることができる。すでに前章で見てきたとおり、二つの動作の主体には感応するところがあるのであった。このことを反映して、二つの動作も、感応の相の下に進行するところがある。「屈往」の程度が大きければ大きいほど、「伸来」の実現するところは大きくなるのが実情である。『易経』繫辞下からの引用文Ⅲのいう、尺取り虫や龍蛇

の「屈往」は、そのことを示している。

では、「屈往」の程度が大きいということは、目下の我々の関心のあるところからすれば、どういうことであろうか。それはこれまで考察をつづけてきたところに明らかなように、「竭（つきる）」ことの度合いが大きいということである。このことは、「虚」の、あるいは「静」の度合いが深く大きいのであるといっても同じことである。以下に、このことについて、『管子』の説くところをみていきたい。

○心の體に在るは、君の位なり。九竅の職あるは、官の分なり。心、その道に處れば、九竅、理に循ふ。嗜欲充盈すれば、目は色を見ず、耳は聲を聞かず。上、その道を離るれば、下、その事を失ふ。馬に代りて走ること毋かれ。その力を盡さしめよ。鳥に代りて飛ぶこと毋かれ。其の翼をして弊らせしめよ。物に先だちて動く毋かれ、以てその則を觀よ。動けば則ち位を失ひ、靜なれば則ち位を失ふ。靜なれば乃ち自らう。道は遠からずして、而も極め難きなり。人と竝び處りて、而もえがたきなり。其の欲を虚しくすれば、神まさに入り舍らんとす。掃除潔からざれば、神は留處せず。人はみな智を欲して、而もその智なる所以を索むるなし。智か、智か。これを海外に投じて、自ら奪はるること無からん。之を求むる者は、之を虚しくするものに及ばず。夫の聖人は求むること無きなり。故によく虚なり。虚しくして形なき、これを道といふ。萬物を化育する、これを德といふ。君臣父子、人間のことは、これを義と謂ふ。登降揖讓し、貴賤に等あり、親疏に體あり、これを禮といふ。簡物小大、道を一にして殺僇禁誅する、これを法と謂ふ。

夫れ道は安んずべくして、而も説くべからず。眞人の言は、義ならず頗ならず。口より出でず、色にあらはれず。四海の人、たれかその則を知らん。天を虚と曰ひ、地を靜といふ。乃ち貸はず。その宮を潔め、その門を開き、私を去りて言ふこと毋ければ、神明ここに存す。紛乎としてそれ亂るるが若きも、これを靜にすれば、すなはち自ら治まる。強も徧くは立つること能はず、智も盡くは謀ること能はず。物はもとより形あり。形はもとより名あり。名のあたる、これを聖人と謂ふ。故に必らず不言無爲の事を知り、然る後に道の紀を知る。形を殊にし、執ひを異にし、萬物と理を異にせず。故に以て天下の始めとなるべし。人の殺すべきは、その死を惡むを以てなり。其の利すべきは、その利を好むを以てなり。是を以て君子は好に休はれず、惡に迫られず、恬愉無爲にして、智と故とを去る。其の應ずるや、設くる所にあらざるなり。其の動くや、取る所に非るなり。過ちは自ら由るに在り。罪は變化するにあり。この故に有道の君の、その處るや知る無きがごとく、その物に應ずるや、之に偶するが若きは、靜因の道なり。（心之在體、君之位也、九竅之有職、官之分也、心處其道、九竅、循理、嗜欲充盈、目不見色、耳不聞聲、上離其道、下失其事、毋代馬走、使盡其力、毋代鳥飛、使弊其翼、毋先物動、以觀其則、動則失位、靜則失位、靜乃自得、道不遠而難極也、與人竝處、而難得也、虚其欲、神將入舍、掃除不潔、神不留處、人皆欲智、而莫索其所以智、智乎、智乎、投之海外、無自奪、求之者、不及虚之者、夫聖人無求也、故能虚、虚而無形、謂之道、化育萬物、謂之德、君臣父子、人

間之事、謂之義、登降揖讓、貴賤有等、親疏有體、謂之禮、簡物小大、一道殺僇禁誅、謂之法、夫道可安、而不可說、眞人之言、不義不頗、不出於口、不見於色、四海人、孰知其則、天曰虛、地曰靜、乃不貸、潔其宮、開其門、去私毋言、神明若存、紛乎其若亂、靜之而自治、強不能徧立、智不能盡謀、物固有形、形固有名、名當、謂之聖人、故必知不言無爲之事、然後知道之紀、殊形異埶、不與萬物異理、故可以爲天下始、人之可殺、以其惡死也、其可利、以其好利也、是以、君子不休好、不迫乎惡、恬愉無爲、去智與故、其應也、非所設也、其動也、非所取也、過在自由、罪在變化、是故、有道之君、其處也、若無知、其應物也、若偶之、靜因之道也＝『管子』巻第十三　心術上第三十六）

本能的なものをも含めて、心が欲望のとりこになっていない状態、何物にも占領されていない空白の状況、心のこのようなあり方を、これまでのべたことによって、「竭」あるいは「虛」さらに又、「靜」ともいいあらわすことができる。心がこのようになると、身体の各器官は、本来の働きに従って十分に作動すると、ここに引いた『管子』の書ではいう。そうして、さらにこの状態を、君主である「心」が、部下としての「器官」を十分に働かせることが出来ることにたとえている。「竭」・「虛」・「靜」が、「力」を生むと、ここからいうことができるであろう。

右と同様のことを、また以下のようにいう。「物」に先立ちて動くなかれ、と。馬に先立って走ったり、鳥よりも、軽々しく、飛ぶことを試みたりなどしてはならない。こうした「異物」の能力の由来するところを、十分に窮め尽してのち、はじめて動くべきであるとする。そのようにしてはじめて、馬や鳥の能力を十分に尽させ、その人の思うがままに操ることができるという。なぜならば、ひたすら「物」に勝ろうとする欲望を、一歩退いて「物」を冷静に観察する過程において、心の中から消去していき、そのあとに「虛」・「靜」が生じたからに外ならない。

以上の例は、「心」をやみくもに働かせてはならないことを比喩している。このことを会得している「心」のあり方が、「靜」というものである。むやみに動くだけでは「力」は発揮できない。それどころか、もし君主であるならば、その人は地位を失ない、命をおとす危険性さえそこにはある。「靜」にかぎるということになるであろう。そのことを、ここに引いた文章では、「動けば則ち位を失う。靜なれば乃ち自得す」と述べている。

「心」を「竭」・「虛」・「靜」にしたとき、大きな力が生ずるというのであるが、こうした状態のことを、右の引用文では、「心」に「神」が宿るという表現をとっている。このことの意味を、以下に引く『管子』の書の説明によって、さらに明らかにしてみたいと思う。

○物に先だちて動くことなかれとは、搖く者は定まらず、趨る者は靜ならず、動の以て觀るべからざるを言ふなり。位はその立つ所を謂ふなり。人主は陰に立つ。陰は靜なり。故に曰く、動けば則ち位を失ふ、と。陰なれば則ち能く陽を制す。靜なれば則ち能く動を制す。故に曰く、靜なれば乃ち自ら得（う）、と。道の天地の間に在るや、其の大なること外なく、其の小なること内なし。故に曰く、遠からずして、而も極め難きなり、と。

虚の人と與にするや間なし。ただ聖人のみ虚道を得(う)。故に曰く、竝び處りて、而も得難きなり、と。人の職とする所のものは情なり。欲を去れば則ち寡、寡なれば則ち静なり。静なれば則ち精、精なれば則ち獨なり。獨なれば則ち明、明なれば則ち神なり。神は至貴なり。故に館は辟除せざれば、則ち貴人これに舍らず。故に曰く、潔からざれば則ち神をらず、と。(毋先物動者、搖者不定、趮者不静、言動之不可以觀也、位者謂其所立也、人主者立於陰、陰者静、故曰、動則失位、陰則能制陽矣、静則能制動矣、故曰、静乃自得、道在天地之間也、其大無外、其小無内、故曰、不遠、而難極也、虚之與人也無間、唯聖人得虚道、故曰、竝處、而難得也、人之所職者情也、去欲則寡、寡則静矣、静則精、精則獨矣、獨則明、明則神矣、神者至貴也、故館不辟除、則貴人不舍焉、故曰、不潔則神不處‖『管子』巻第十三　心術上第三十六)

このように「静」の発揮する力は大きい。「静なれば則ち能く動を制す」と、ここにいわれているとおりである。さらに、「静なれば則ち精、精なれば則ち独なり。独なれば則ち明、明なれば則ち神なり」といい、「静」の発揮する大きな力を、「神」の名を以て表現しているのである。

このように、「心」をめぐって「静」ということをいうとき、それは「心」の周囲が、つまり環境が「静」であるとするのではない。あくまで「心」そのものが「静」であるのである。

二　軍　事

君主はある物事を実現させるために、「静」を守るということを行なうのであると、『管子』ではいう。君子のこの行為は、「心」を虚しくしてひたすらその時節の「気」の増長を助けることに専念することを、その一つの例としてあげることができる。

『管子』ののべるところでは、「静」とは心が「竭」、すなわち「虚」になることであり、それは次の段階の大きな「力」の出現を予想するものであった。この「力」とは、「物」を生む力そのもの、あるいはそれに深くつながりをもつもののことである。

「静」の持つ、この「力」の秘密を解こうとしているのが、宋儒たちの意見の数々である。宋儒たちの意見は、多く『易経』に負っている。それは具体的には、「気」の感応と屈信(‖伸)往来という運動の提起によるものであった。「気」の「屈」「往」の状態を「静」とみ、この「静」こそが「物」を生み、発展させる契機、「力」となると見るのが、宋儒の基本的見解であった。

『管子』は、君主の心が「静」であり、ひたすらに「土気」なら「土気」の増加を助ける特定の行為に専念すれば、その「土気」を増加させることが出来るとする。その結果、その「土気」によって季節を転換させ、あるいは「土気」によって生ずる「物」の数々を生み出すことを助けることになる。君主のこうした「心」の「静」であることによる、「力」の発揮を、『管子』では「神」になぞらえていたことを、ここで想起したい。「静」のはらむ「力」の大きさは、

それほどに大きなものと認識されていたのである。

『管子』においては、「気」は相当程度において、君主は操作することが可能であると考えられていたということが、前述の内容によってわかるのである。そうした君主の「気」の操作によって、季節の転換がスムーズになり、「物」の発生が助けられるのである。「坦気修通し、凡物、静に開き、生理を形（あらは）す。＝『管子』巻第三　幼官第八」は、そのことの一端を述べている。

㈠　軍事と「静」

以上のべたところから、「静」を心に確立することによって、君主は、内治はほぼ意のままに行うことが可能であるということができるであろう。では、外国を治めようと意図する場合、ことに軍事によってそれを行おうとする場合はどうであろうか。対外軍事行動について、『管子』の述べるところを、つぎに引く文章によって見てゆきたい。

○必ず得文威武、官習は勝の務なり。時因は勝の終なり。無方は勝の幾なり。義を行ふは勝の理なり。名實は勝の急なり。時分は勝の事なり。伐を察するは、勝の行なり。備具は勝の原なり。象無きは勝の本なり。獨威を定むるは勝つ。計財を定むるは勝つ。聞知を定むるは勝つ。選士を定むるは勝つ。祿を制するを定むるは勝つ。方用を定むるは勝つ。綸理を定むるは勝つ。死生を定むるは勝つ。成敗を定むるは勝つ。依奇を定むるは勝つ。實虛を定むるは勝つ。盛衰を定むるは勝つ。（必得文威武、官習、勝之務、時因、勝之終、無方、勝之幾、行義、勝之理、名實、勝之急、時分、勝之事、察伐、勝之行、備具、勝之原、無象、勝之本、定獨威勝、定計財勝、定聞知勝、定選士勝、定制祿勝、定方用勝、定綸理勝、定死生勝、定成敗勝、定依奇勝、定實虛勝、定盛衰勝＝『管子』巻第三　幼官第八）

ここには戦争に勝利をおさめる原則を二十一ケ条に分けてのべている。しかしながら、これだけが勝利を得るための条件ではないとして、『管子』は以下に十九ケ条の条件を列挙し、つけ加えている。

○擧機誠要なるときは、則ち敵量らず。利を用ふること至誠なるときは、則ち敵、校せず。名を明らかにし實を章らかにするときは、則ち士、節に死す。奇擧、不意に發するときは、則ち士、用ひらるるを歡ぶ。物を交へ方に因るときは、則ち器械そなはる。能に因り備へを利するときは、則ち求め必らず得(う)。務を執り本を明らかにするときは、則ち士、偸せず。備具、常なきは、方應なきなり。鈔に聽く、故に能く未極に聞く。新に視る、故に能く未形に見る。濬きに思ふ、故に能く未始を知る。驚に發す、故に能く無量に至る。昌に動く、故に能くその寶を得(う)。謀に立つ、故に能く實にして故す可からざるなり。器なり教守るときは、則ち道里を遠しとせず。號審らかに教施せば、則ち山河を險とせず。搏一純固なるときは、則ち獨行して敵なし。號を愼み章を審らかにすれば、則ちその攻め權與を待たず。必勝を明らかにすれば、則ち慈者も勇に、器に方ぶもの無ければ、則ち愚者も智に、守らざるを攻むるとき、則ち拙者も巧なるは、數なり。動くに十號を愼しみ、明らかに九章を審らかにし、飾めて十器を習ひ、善く五官を習ひ、謹みて三官を

修め、必らず常主を設け、計必ず先づ定め、天下の精材を求め、百工の鋭器を論じ、器成れば否臧を角試し、天下の豪傑を収め、天下の稱材を有す。行くこと風雨の若く、發すること雷電の如し。（擧機誠要、則敵不量、用利至誠、則敵不校、明名章實、則士死節、奇擧發不意、則士歡用、交物因方、則器械備、因能利備、則求必得、執務明本、則士不偸、備具無常、無方應也、聽於鈔、故能聞未極、視於新、故能見未形、思於濬、故能知未始、發於驚、故能至無量、動於昌、故能得其寶、立於謀、故能實不可故也、器成教守、則不遠道里、號審教施、則不險山河、搏一純固、則獨行而無敵、愼號審章、則其攻不待權與、明必勝、則慈者勇、器無方、則愚者智、攻不守、則拙者巧、數也、動愼十號、明審九章、飾習十器、善習五官、謹修三官、必設常主、計必先定、求天下之精材、論百工之鋭器、器成、角試否臧、収天下之豪傑、有天下之稱材、行若風雨、發如雷電＝『管子』巻第三　幼官第八）

ここにあげられた勝利の条件のうち、注目すべきところは、以下の二点である。

第一点は、九・十・十一番目にあげられている部分についてである。ここでは「鈔に聞く、故に能く未極に聞く。新に視る、故に能く未形に見る。濬（ふか）きに思う、故に能く未始を知る」という。この「未極」・「未形」・「未始」ということに対しては、以下のような注解がある。まず「未極」については、以下のごとくである。

○極は至なり。（極、至也＝安井息軒）

○聽くところ深遠にあり。故によく極理に聞く。（所聽在於深遠、故能聽於極理＝尹知章）

息軒の解は、「未だ至らざる（音）を聞くことができる」ということになる。尹知章は「極理に聞く」という。両者とも、実際の「音」を聞くのではなく、その現実の「音」となる前の「音」を聞きとるということをいっているのである。これは聴覚についていっているとみてよい。

「未形」について、つぎにみていきたい。

○事の初めに視る。故に能く未だ形を成さざるの時に見る。（視於事初、故能見未成形之時＝安井息軒）

○未だ形をなさずとは、新事まさに起らんとす。視るところのもの新たにあり。故に未だ形をなさざるを見るなり。（未形者、新事將起、所視者在新、故見未形也＝尹知章）

「未だ形を成さない」という解釈の仕方で、二人とも一致している。物事が起こる前の段階で、すでにその「物事」のありさまを見るというのである。従って、これは主に視覚の点からいっているのである。

さいごに「未始」についてみておきたい。

○其の思い深遠、故によく未だ始らざるを知る。（其思深遠、故能知未始＝安井息軒）

○未だ始らざるとは、事の深浚なるものにして、思うところ深きにあり。故に未だ始まらざるを知る。（未始者、事之深浚者、所思在深、故知未始＝尹知章）

物事が始まらない前に、現実の奥の奥において、すでにある動きが萌しているとする。その萌しを、思考力によってさぐりあてるこ

とをここではいう。

以上にのべた注解者たちのいうところを綜合すると、軍事行動をとるにあたって「未極」「未始」を追求するということは、常人の感覚を超えた世界、そこに出現する現実世界の存在の根源にある形而上的なものをさぐりあてることを意味する。いうなればそれらは、現実世界を「実」の世界であるとすると、「虚」の世界のこととしかいいようがない。なお、ここに今いう「虚」の世界というのは、軍事をめぐっての諸現象の背後の世界のことをいっているのであるということを確認しておかねばならない。

軍事に関してのこの「虚」の世界とは、すでに第一章で見てきたところの「静」の世界のことであるということができる。この世界への参入が、そこからする認識が、現実存在の世界に大きな力として働く。そうして、それが軍に勝利をもたらしてくれるのである。軍事行動にとって、この世界への認識が欠かせないゆえんである。

(二) 軍事と「気」

前項(一)で引いた『管子』からの引用文において、次に注目したいのは、最後の「九章を審らかにし、飾(いまし)めて十器を習い云々」というところに対してである。この部分は、軍事における「旗」と主要な「武器」の働きについての言及である。この二つのことへの強い関心こそは、当然のこととして戦勝への大きな動力ともなるものに外ならない。しかしながら、『管子』における場合、この二事への関心はやはり独特である。以下にそれについて見てみよう。

○此れ圖の方中に居るなり。旗物は青を尚び、兵は矛を尚び、刑は則ち寒を交へて害欽す。器成れども守らざるは不知を經ればなり。教習すれども著はれざるは、不意に發すればなり。不知をふ、故にこれを能く圉ぐなし。不意に發す。故にこれによく應ずるなし。之によく應ずるものなし、故に全く勝って害なし。之をよく圉ぐなし。故に必ず勝って敵なし。四機明かならざるときは、九日を過ぎずして、游兵、軍に驚く。障塞審かにせざるときは、八日を過ぎずして、外賊、間を得(う)。由守慎まざれば、七日を過ぎずして内に讒謀あり。詭禁修まらざるときは、六日を過ぎずして、竊盗する者おこる。死亡食はざるときは、四日を過ぎずして、軍財、敵にあり。(此居於圖方中、旗物尚青、兵尚矛、刑則交寒害欽、器成不守、經不知、教習不著、發不意、經不知、故莫之能圉、發不意、故莫之能應、莫之能應、故全勝而無害、莫之能圉、故必勝而無敵、四機不明、不過九日、而游兵驚軍、障塞不審、不過八日、而外賊得間、由守不慎、不過七日、而内有讒謀、詭禁不修、不過六日、而竊盗者起、死亡不食、不過四日、而軍財在敵=『管子』巻第三　幼官第八)

また、以下の文章の説くところに注目したい。

○此れ圖の東方の方外に居るなり。旗物は赤を尚び、兵は戟を尚び、刑は則ち疆郊に燒交す。必らず其一を明らかにし、必らずその將を明らかにし、必らずその政を明らかにし、必らずその士を明らかにす。四のもの備はるときは、則ち治を以て亂を擊ち、成を以て敗を擊つ。數戰ふときには則ち士疲る。數勝てば、則ち君驕る。驕君、疲民を使へば、則ち國危し。至善は戰はず。其次は之を一たびす。大勝は衆勝を積み、義にあらざるもの無

し。以て大勝と爲すべし。大勝とは勝たざる無きなり。（此居於圖東方方外、旗物尚赤、兵尚戟、刑則燒交疆郊、必明其一、必明其將、必明其政、必明其士、四者備、則以治擊亂、以成擊敗、數戰則士疲、數勝則君驕、驕君使疲民、則國危、至善不戰、其次一之、大勝者、積衆勝、無非義者焉、可以爲大勝、大勝無不勝也＝『管子』巻第三　幼官第八）

さらに、以下の文章もつづけて見ていくことにする。

○此れ圖の南方の方外に居るなり。旗物は白を尚び、兵は劒を尚び、刑は則ち昧を紹ぎ斷絶す。端なきに始まり、窮り無きに卒る。端なきに始まるは道なり。窮りなきに卒るは德なり。道は量る可からず。德は數ふ可からず。量るべからざるときは、則ち衆強も圖ること能はず。數ふ可からざるときは、則ち爲詐も敢てむかはず。兩者備施するときは、動靜、功あり。之を畜むるに道を以てし、之を養ふに德を以てす。之を畜むるに道を以てするときは則ち民和す。之を養ふに德を以てするときは則ち民合す。和合するが故に能く習ふ、習ふが故に能く偕ふ。偕習以て悉するときは、之を能く傷る莫きなり。（此居於圖南方方外、旗物尚白、兵尚劒、刑則紹昧斷絶、始乎無端、卒乎無窮、始乎無端道也、卒乎無窮德也、道不可量、德不可數、不可量、則衆強不能圖、不可數、則爲詐不敢鄉、兩者備施、動靜有功、畜之以道、養之以德、畜之以道、則民和、養之以德、則民和、和合、故能習、習故能偕、偕習以悉、莫之能傷也＝『管子』巻第三　幼官第八）

さいごに、つぎの文章を読んでいくことにする。

○此れ圖の西方の方外に居るなり。旗物は黑を尚び、兵は脅盾を尚び、刑は則ち灌流に游仰す。數を察して治を知り、器を審らかにして勝を知り、謀を明らかにして勝に適き、德を通じて天下定まる。宗廟を定め、男女を育す。官四分し、則ち以て威を立て、德を行ひ、法儀を制し、號令を出す可し。至善の兵たる、地をこれ求むるに非るなり。人を罰するは是れ君なり。義を立てて、之に加ふるに勝を以てし、至威にして、之を實すに德を以てし、之を守りて而る後に勝心を修め、海内を焚す。民の利とする所は之を立て、害とする所は之を除けば、則ち民人從ふ。立ちて六千里の侯と爲れば、則ち大人從ふ。（此居於圖西方方外、旗物尚黑、兵尚脅盾、刑則游仰灌流、察數而知治、審器而知勝、明謀而適勝、通德而天下定、定宗廟、育男女、官四分、則可以立威行德制法儀出號令、至善之爲兵也、非地是求也、罰人是君也、立義、而加之以勝、至威、而實之以德、守之、而後修勝心、焚海内、民之所利立之、所害除之、則民人從、立爲六千里之侯、則大人從＝『管子』巻第三　幼官第八）

ここでは、これまで『管子』から春夏秋冬の四季に戦われる戦争において用いられるべき旗と武器についての言及を引用したのである。

春の戦争では、旗は青色のものを大事にし、用いる武器では矛が尊重される。これらのうち、旗の青い色は五行の春の配当、「木青」にならい、武器の矛は、春の芽生えの鋭い形にかたどったものである。[8]

夏の戦争では、旗は赤色、武器は戟が重んじられる。旗の赤色は

五行の色の配当で夏の「火赤」による。武器の戟は、夏の草木の繁茂のさまをあらわしているとして重視するのである。[9]

秋に戦われる戦争においては、戦の色は白が尊ばれる。武器で重んじられるのは剣である。旗の白色は、五行の配当では秋の「金白」にちなんだものである。剣は、物を断ち切ることにすぐれている。秋には木の葉が枝から断たれて地に散り落ちる。剣が秋の戦いに重視されるのも、このような連想によるものである。[10]

冬に戦われる戦いでは、旗の色は黒が尊重される。武器は脅盾(むな盾)が重んじられる。旗の黒色は五行の配当、「黒冬」を反映したものである。武具の脅盾は胸部を収蔵し保護するものである。地上の植物が冬期に地下に収蔵されることの連想から、冬の戦争では、脅盾が重んじられるわけである。[11]

戦いにおける旗と武器および武具の働きの大きさは、改めていうまでもない。これまで述べたように、これらの戦争の用具は、旗の方は戦いの行われる季節に支配的な五行の「気」を象徴するところの色にそめられている。一方、武器および武具の方は、五行の「気」の、実際の生成物、ないしは変成物ともいえる、各々の季節の自然そのもののあり方を象徴し、反映している。従って、軍事における旗も、武器・武具も、その戦争の行われる時季の「気」に深くかかわりを持ち、その「気」の生成・運動を助け、補う働きをしていると見てよいであろう。

戦いを有利に進行させ、その結果として勝利を得るために、「気」の働きを助け、増大させる配慮が、戦争を行う者の側において成されているということを、これまで見てきた。戦勝と、これら「気」の関係について、『管子』のなかでは、ごく一般的なかたちで、以下にのべるように表わされている。ここから、我々はある示唆を得ることができるであろう。

○命を天地に會請し、気和を知るときは、則ち生物従ふ。緩急の事を計るときは、則ち危ふきを危ふくして而も難なし。器械の利を明らかにするときは、則ち難を渉りて而も變ぜず。先後の理を察するときは、則ち兵出でて而も困しまず。出入の度に通ずるときは、則ち深く入りて而も危ふからず。動靜の務を審らかにするときは、則ち功得て而も害なし。取與の分を著かにするときは、則ち地を得て而も執れず。號令の官を愼むときは、則ち事擧げて功あり。此れ圖の北方の方外に居るなり。(會請命於天地、知氣和、則生物從、計緩急之事、則危危而無難、明於器械之利、則渉難而不變、察於先後之理、則兵出而不困、通於出入之度、則深入而不危、審於動靜之務、則功得而無害、著於取與之分、則得地而不執、愼於號令之官、則擧事而有功、此居於圖北方方外=『管子』巻第三　幼官第八)

国君たるもの、天地の神々を合わせ祭り、その命に従って、大地に陰陽の「気」の調和を実現させる。そうすると、人をもふくめて、すべての生物がその治に従うと、ここではいう。

すでに我々は、軍事における「気」の増加への、いわば補助的活動ともとれる工夫の数々について見てきた。軍事行動は、結局、自軍および自国に「気」の調和を実現し、ついで敵軍と対戦する。この対戦に際して、敵国を含めてのより広い範囲に、「気」の調和を実現する。そうして、ここに引いた文章の冒頭に明らかにされている

ように、「すべての生物を従わせる」、というところに、軍事の本質があると『管子』では見ているととることが出来よう。

おわりに

一国の政治を執り行うについて、国君は「静」を自己の一身に実現し、そこからある「力」を得て、「気」の調和を実現するためのさまざまの行動にしたがった。このことが、国君の内治がよりよくおこなわれるための必須の条件とされた。

一方、宋儒は「気」の生成消長を論ずる。そうして、「静」が、一面、「力」そのものであるゆえんを、「気」の「屈伸往来」という現象あるいは動作の、「屈往」の部分から説明する。

「静」を持する国君の、「気」への補助行為における「力」の由来または根源を、我々は宋儒の示唆によって推知することができる。「静」は、宋儒のいうところの「屈往」に外ならない。その「静」に由来する「力」で、国君は相当程度まで「気」を有効に操作できると、『管子』の書ではのべられている。

「軍事」には、国内を治めるという面ばかりではなく、外国を治めるという側面もあるということを見のがしてはならない。こうした「軍事」では、「未極」「未形」「未始」という、「静」ともいえる部分への注目が必要とされる。この、「軍事」における、「静」への認識から「力」を得、それが「旗」「武器」「武具」等の選定と相まって、「軍事」における、「気」の操作を有効にすすめることとなる。この「気」の操作によって勝利を実現し、ついには外国をも支配することが可能となる。したがって、「軍事」にもやはり「静」を起点として、「気」の操作を行なうというところがあるのだということができよう。そうして、結局のところ、「気」の調和を自国と敵国との両国に、積極的に作り出し、両国の人民を、その「気」の調和のゆえに従わせるというのが、「軍事」の「気」の面からの構造であるということができるのである。

『管子』にしばしば説かれる「静」は、したがって、サイレント(Silent)という消極的なあり方をするのではない。それは、「気の調和」を目ざしての「気の操作」に対する、大きな力を生むところの、権力の基盤であるといっても過言ではないからである。

注

①『管子纂詁』本。
②中央井也＝尹知章注。
③尹知章云、倮獸謂淺毛之獸、虎豹之屬、衡謂、蓋鑽骨取火＝『管子纂詁』。
④遠藤哲夫著。明治書院、平成元年刊。
⑤湯浅幸孫『近思録』上50頁、昭和47年、朝日新聞社刊、参照のこと。
⑥湯浅幸孫、前掲書、49頁参照のこと。
⑦ここでいう「九章」については、『管子』巻第六、兵法第十七参照。
⑧尹知章云、木用事、故尚青、衡謂物色也＝『管子纂詁』。
　尹知章云、象春物之芒鋭＝『管子纂詁』。
⑨尹知章云、火用事、故尚赤＝『管子纂詁』。
　尹知章云、象夏物之森聳＝『管子纂詁』。
⑩尹知章云、金用事、故尚白＝『管子纂詁』。
　劒主斷、秋木葉謝枝、若劒斷物＝『管子纂詁』。
⑪尹知章云、水用事、故尚黑＝『管子纂詁』。

尹知章云、象時物之閉、盾或著之於脅、故曰脅盾、衡謂、凡用矛戟者、前左而進、蓋著之左脅也、一説、脅劒也、盾所以劒身＝『管子纂詁』。

付　記

1小稿の拠った『管子』の本文は、主として安井息軒の『管子纂詁』（慶應元年乙丑の版本および大正五年冨山房發行の漢文大系21所収）本である。

2本文の決定、および本文の注解に、左記の二書から受けた裨益は大きい。

遠藤哲夫『管子』(上)(中)(下)　明治書院平成元年～四年出版。

趙守正『管子通解』(上)(下)　北京経済学院出版社一九八九年出版。